

追悼

植村慶一先生のご逝去を悼む

(群馬大学大学院医学系研究科神経薬理学分野) 白尾 智明

本学会の大会長、理事長、監事を歴任された慶應義塾大学名誉教授植村慶一先生は去る平成 29 年 12 月 29 日に逝去されました。享年 82 歳でした。突然の知らせに遭遇したその時はとても信じられず、しばらく茫然自失の状態でした。私が追悼の言葉を申し上げるのに最適な人間とは思いませんが、植村先生が主宰された慶應義塾大学生理学教室に助教授としてお仕えたものとして、植村先生のお人柄をしのびたいと思います。植村先生に最初にお会いしたのは、私が群馬大学の大学院生の時で、植村先生が当時群馬大学医学部脳外科教授の大江千廣教授に招かれて髄鞘の膜タンパクについてのセミナーをされた時でした。昔の話ですので、定かではありませんが、P0 タンパクや PASII 蛋白のお話をされたように記憶しております。臨床の教室のセミナーに一人紛れ込んだ基礎の大学院生の私にも気さくに接して下さり、いろいろご助言をくださいました。

それから 7 年後、私は慶應義塾大学に移られた植村先生に助教授として迎えていただけることとなりました。植村先生が塚田裕三先生の後を継がれたばかりの時でしたが、三浦正幸先生(現東京大学教授)をはじめとする新進気鋭の若手研究者が集って、L1 タンパクの研究を中心にいろいろな研究が進んでい

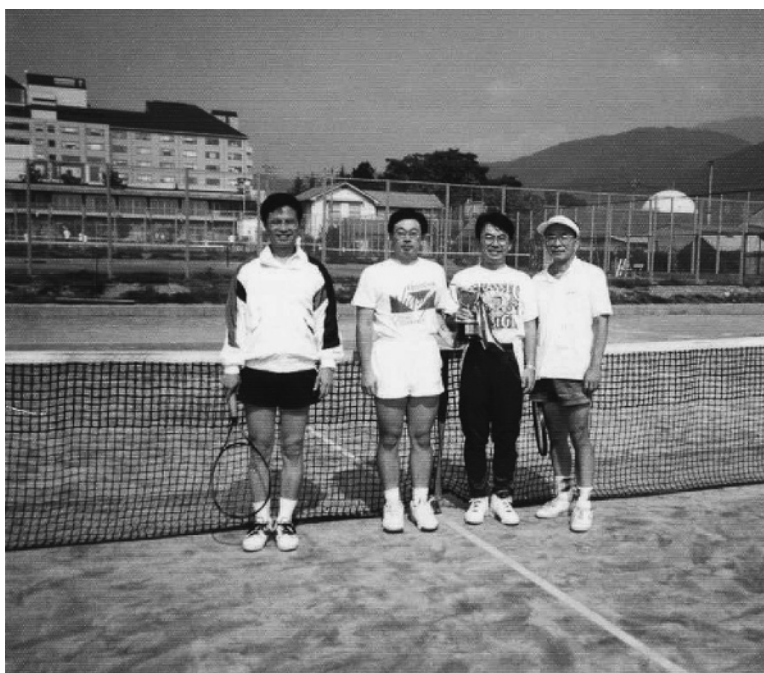


写真 1



写真2



写真3

素晴らしい研究室でした。そんな中で、私がドレブリンの研究を続けることを、植村先生は快く許してくださいました。そればかりでなく、当時脳外科から生理学教室に研究に来ていた優秀な若者達を私のチームに加えてくださいました。ドレブリン研究の今の展開は植村先生なしには語れません。実は、これまでのドレブリン研究の集大成であるモノグラフが昨年秋に出版され、植村先生にお届けする矢先の訃報でありました。植村先生に喜んでいただけたらと思っておりましたが、大変に残念でなりません。

植村先生は研究ばかりでなく、テニスを大変愛されておりました。写真1は神経化学学会のテニス大会での写真です。左から、池中一裕先生（当時大阪大学蛋白研）、吉田明先生（当時三菱化学学生命研）、白尾、植村先生が並んでいますが、当時は植村先生が優勝されることがほとんどでした。植村先生は御自宅そばの三鷹のテニスクラブで我々弟子一同を集めてしばしばテニス大会を開催されました。テニス

大会の後ご自宅にお伺いした時に、大型のディスクオルゴールが据え付けられた素敵なリビングルームを見て、植村先生のセンスの良さを再認識したことをまるで昨日のことにように思い出します。

私が植村先生から直接の御指導をうけたのはわずか2年だけでしたが、母校の群馬大学に教授として戻って以降も、研究室運営、外国の研究者との付き合い方、論文のオーサーシップの決め方など、様々な局面でいろいろご指導いただきました。感謝の念に堪えません。

最近の思い出は、2015年に私が大会長を務めさせていただいた第58回日本神経化学会の最終日の、「History and future of Japanese Society of Neurochemistry (JSN) and International Society of Neurochemistry (ISN)。」と題した特別企画ラウンドテーブル(写真2)で、植村先生にはその企画と司会をお願いしたことです。植村先生(写真3の右から二人目)はいつもの軽妙洒脱な口調で会を進行されました。植村先生の周りにはいつも笑い声が絶えません。写真の向かって左側の鈴木邦彦先生と御子柴克彦先生の笑顔からも、植村先生のお人柄が偲ばれます。

当学会の会員から国際神経化学会(ISN)の理事や種々の委員長になられた方が大勢いらっしゃいますが、これもまた植村先生のご尽力の賜物です。植村先生は日本においてISNの会を立ち上げられ、All Japanのサポート体制を敷いてくださいました。2014年には第6回ISN Special Conferenceの東京への招致に成功し、昨年は2021年のISN Biennial Meetingの日本での開催が決まったのは会員諸氏もご存知のところだと思います。2021年の大会でも、あの植村先生の絶妙な語り口を拝聴できるものと思っておりましたが、誠に残念でなりません。

急逝された植村慶一先生の偉大なる業績と人格とに深く敬意を表し、心より御冥福をお祈り申し上げます。